



中村俊定文庫
文庫 18
523





いづやまのなるまにのれりて
 くらき所をせり口くるくもあらず
 浪のあらまはくつれけえり
 ふいのかまふそ甲にまきの箱のま
 あひふもむハ俚俗まら卯もまら後ら
 白上り一漁子持たしとせりなや一貫
 乃まら一しるく千古の確言ぬるま
 せりあしとせりまらてまらて



自序

定家寂蓮西行三仙の秋の黄昏の歌三首をとりて
と淋しむ体の最上とす詠潜の漢句をたるとてかんことり
を尋らるに先寂莫の地をんもとめそ句を巧より終り寂
しきう躰となりて題のかんことりハ用とむまありそま一の
書あり而謂五光井許六落柿舎去来を書きてて同じ
答しもの也幸ハ本のよき知まこすこれを又るに蕉門の
奥旨をあけつらふのこゝ翁の句法よきひをとりといふよみ
あるは許六いよき也指ゆさり一寂六々光のえりめ二ツの

と一去来これに六すまゝなりとさハお覚れやと
はつと相みあつた年暮ひめまゝ一り今杉蔭の風八隅の
葉末もつゞり際なまゝの油のこく流布はまゝの泉はこく
山は谷振川は筏のる男もこれいふを信はなりさりや口すまひ
寂し人とのとも暮の句乃寂まいかれ枝は鳥のともりのら
乃敷道徳の風骨のかゝひよりなりと女声の麻を刈
あらんさむといて庭のいなほの苔むすど或ハ鐵鈎の鼻あつ
塗らうんと志をりといて糸糸の調の甲は入調もや文
なま音色も等しくたたり或はたつてもあつぬ山路は標本
える枝折ともおほゆる一書中ハ曰志をりさかハ趣向詞書
の閑寂なみ紙いふあつたさひと寂まハ異なり志をり

憐なる句ハ別なりとあり落柿舎五老井の流ハは書書の
とちまりあらんを今世の人多傳下ともおほえは傳は終と
いつとも容易に形すつともあつ一そといお梓めさくもおほす
き奥係を種するに似れたととく諸傍は執りてと兒
かりとも暮の風をたつともおほハ皆是同志の友あらん四海
兄弟友つたに何より隔らん親疎ま人の器はよる一秘事
ともせ一我放蕩ハなうく初業ハ幸あらん今是を顯に
不信の聲ハとつ一信深く願ふ上る人を蕉門みたより
おれ人なりさあつハ秘して蠹とあらんや顯して玉虫の
光めてつゞらんやあつ一こ暮去来許六の三哲ゆれ
こつめと云

雑話

かゝる文の學おぼやまるといふて大に廣ろりなく、
 唐人も類あるは時なるふ流俗の言は裏家貸して
 表家とていふと申す和歌ハ^{オモヤ}連歌の表家とて俳諧とてハ
 我朝の宝器なり和歌ハ連歌の表家とて俳諧とてハ
 戯とて等しいといふも千萬世量の思をうけ守志を
 連歌の底を借て富るより豊なりそのち屋らあけ
 けりといふ心さういふとて居るむ家建んと
 もおぼやまるとの先を礎を平均しく土臺を究むて
 志うて柱組あり貫あり枅あり垂木ありかゝる事

高して家倒て過かうれよを本工を撰の間架布直
そふ處を乃座をるに安うん事をねもつふ也土基をとて
りひと破ハ獲句ときいんいそ才三の田リで文字を
何故よで文字よりといふそ月花の定座おのひ去燥の式ハ
何のふあまきるもねそと彼や是確と教との始をあり
さうすつーこれと土基成極るといふんはよく俳諧狂句
み遊ふ人半ハ師傳といふもなく慢ハ口すさのいてより
い川えーともなく己こつ文後利根を己くまよりて
彼の集是の抄抄と見ておんさるにゆさりとあはれ不塔も
堪能おたよりて同事を死ハハくねもぬらぬ終み至
つふも至るさああり

おつふと今めうーくんの言を低ーなと却て
さうする人もあらんおつふうのがさうもさる

今ゆくりとゆふ人己くつ學の初を顧よたつかくいつさりの師み従ひいつさりの
より習ゆーそまういへ今時の學を古人の他一書よりて正さうらんハ正さ
ものふー只己み丸といふむ又今時の人の習得ーも師ハいつさりの
師よりる在ーよく思ー

師み事を習ふらんゆありいつ信切の師なりともけつめを
知れや斯あるはさとせるやと才子の同さるあてーこは教る所ハ
稀おらん同は答の暗くもさ師を在とも同お人のんたそく
何く口つくも弁つは事、穿み深く執行地踏み所狭ー
破ハ高階を人負れ登り頂上至てたのれ高ーと臨々
てまあらん師一言おはさ一言それハ何故そハ何う左よ
てまゆやとさ度もく回うー回うー回うーせさぬ事ハ底の
ぬけさる學道といつう人く一隅を奉て三隅み及ま
方あふそこあれおらうといとも左におせる條く采心は悟

一 毎ふやいなやかえりのりまゝとておもふ人もあつむ
決定知りやまゝさるやハおのりくと己ら公よ尋探く
まゝ考まゝ一からさん棟と覆えりり書
籍をんるとも師の半學もまたよん

對師可穿問條々



一 發句切字との事のお布并格字といはん事

一 脇五躰といへとも相對小究るといふ并てんて苗の確

一 芽之古人曰才之苗ハての字で然といふ意

才之ハスミソてあまといふまゝもたあぐハあはと一ハな
ハ確古式ハ必せしとて謂才之の次ハあ句の中ハ混雜
てもこゝろ才之と後ハ一ハんあさあハ祝の句ハなハあ
不叶と云を問ハ一ハ又あ句もハスミソのまゝハ
古人の教あり

一 芽三のに苗リ容易なりと或連歌者流の人云キ

話

これ等の曲を宣ひまゝに異の曲を問へ

神佛へ奉る祝詞或ハ法樂の句なるとハ大方頌イヒマタのりそ

これ等を五音の法をまゝと專マカあするものとて傳授

たりなるといふまゝに傳授の人

ひなほはるや舞つてなかり一庭の春

くる句せありまも然るありけの響横の連音を

此句吟一ノムよやマヒワラナリシニと續也

まゝに正親句といふ事と同

夢想用より事傳るといふはとも一庭の宗匠或功者

なりてハ用なる事なる一まゝを愛を家一人に極く

しくも己と相對脇の句なると次で席さへもいふるあり

いふに傳授なりといふも誠は一事かと

傳授なくしてハ育へる祈禱の俳諧是も同

後表用古人の體を詠草を牛かたりて古実古式なりと見え用ドつてつるものぬ不業の人ありあはれはまゝといふる人

これらをつけてまゝ己の夢の詠なるを顧よ

一花を象は短人付るものむすひ短冊より事傳るとたま

く知人ありとも何故は初のとてそのつ子細志ぬ人も

傳り風像のたなはる終のそのまて人あはれといふは

うけさふんうけさふんとす

誦諧狂連歌となりて連綿と續句一巻首尾するに

いり去燦の式ハ法傘をさしめたるあまの類より何れ

何句去折表を燦二句不續相歩越を燦相二句去まめと

松尾のそとにんてお越を嫌うなうへ二句をハハめとよりお
事と二義に分て書頭——は何故といふ人類のそ

一
季の扱子二ツ二ツ挙ていんんに必は蚕ハまらめて蚕飼
ハ隻と考ると寸々歌の花ハ隻突ハ秋なるを干瓢むくを
復なり若葉の花月新若葉の類いとうりもあま
けホハ言く人知といふも初葉の人んともあさんん
ぬなる——
はしり風土の春秋時候の更異ても遠ありそお持くのんた有はれ
おしゆりていん寸 所は同——
むり—史邦の翁ハ俳諧の式法何まの書と用傳うんと
伺うれえ 詠言ホ先直うん——とまきんしり
先とのあ字ん付てあま——

ゆふか干瓢むいさ遊をや 翁

お島に竹や六月ほとまは 番子

三葉季の扱一ふ—あまうこ

さみしれやかひこ顔ふ葉の畑 翁

蚕畑ふ人を言代の姿うを 曾良

這おようひやう下乃墓の声 翁

けホの句あまも知——翁の葉の畑支考ハ葉葉なりと
評せりさも有つてが予上毛ふを蚕畑の人よきう——は業
とまて葉の畑なるをををを

袖珍抄の序よ

詠諧傳とらう事—世に周く多——予季末一道は顔ひ

詠

氣力を借りて寸神を託し因縁を尋て時々妙あり
語事なくいつちて寸あり我誹諧を師とく者
五人あり師をいへ師とせんといふに成徳の時日ありた
指合るるといふ人よりハ句者といた人こそ是成徳の
かこは境をき要外なり浄傘を有といひ又又高らひなと
光宗匠のい稀くあり貞徳をくく浄傘をきい本
とくうんく道の性の謙なるく一座の了の方をもあ
せくる高情をくをくあめくをき少く一子承を無ハ
姉小路殿の一卷活物也堂上の面々各けてはを人の外は
誹諧を日本のいふ也口受法をきいく宗匠と呼に
答人片腹いといひき諫言なり 芭蕉

又或書子貞徳の大徳なるを誹諧なるを免とくく
つまや人のいぬるを宗周又大徳也宗周ハ誹諧中興乃
用社也下畧

ちせん

これよき證也學者をくくすも事之於師より
同し

一 古人曰といふの附合ハ人といふ合も同しと
又翁曰一卷の遊ハ文藝の上を有くち也とくくして後ハ
及言も同然なりと

季吟 勢秋の月夜と云なき草子の中に

は書文章多くさうも詠諧の文章多くて面白き書こ
いま書肆を尋ねても不有予ら取せハ写す

彦氏うと人よん〜れで月見うさ 翁
病后のおまゝみ落で旅寐うさ 々
ひやくと寝をよま〜で昼寐うさ 々

は之句の外翁よはての字ある小田な〜一介別〜て證とせよ

八九るをうまゝおれ柙 一のれ 々
狂句のう〜の刃ハ并奇お似〜るが 々

柙の句八九るのお節のを搜〜狂句の〜并奇の〜の〜
〜〜哉曲の詮まハ沙まとは西翁の句おま〜るはと
いつともこれおを先よおま〜り〜た〜

京中のお粉雪あけてのみちが 兎士

此句始の人も耳おとらま〜一句なるよ〜ての字よま〜る小田

誰かさうらねはかま〜ん法集の中におま〜ありん合〜
師と同〜

猿引を猿の小袖のまぬさか 翁
蝶掃ハたのう柳つる大工を 々

翁の句とらねはかま〜ん是あま〜く兵別〜て他とす〜
又小袖をとあるもありとの字よすれハが又た〜能
考〜

むあやめさそ若危うさ女うれ 々
あさうかよ我を飯くよ男うさ 々

ろ作東の小田より法洞客語をいひいつるおん情〜
男小の句ハ晋子う夢〜く〜螢ゆ〜ら〜は〜應對の吟とを

つゝおもひよせしけり菊と若やきかたの風流を存して
和歌連歌の人を暇みすとも恥つゝはとまもとて
堪えこむ本槿ハ馬好講釈よりも字て詠りの助と
あらんハこれホの句解なまゝ一義の道德の觀相
容易の人の及無くもあゝ一は境よりく弁別を
らんを花多風月の歌あゝむ

檜柳の志のつを月の名好記 翁

けり志好ハ何と後の月とえ一人もあり各人の徒意
よく探念一
予或人同今世の俳諧漢句ハ連歌めまゝは句あるを
も一人連ハ連也俳ハ俳也是ハ連歌なりといふといふに

答曰いふへき連歌の中より、誦諧とて教へたるは
俳言と云ものなくてハ連俳つゝんを世に存俳諧中
興の用祖として列みふゝの一派をいふは
これ者流よ云あるかとの句く皆俳諧体なりと
又或人同答曰誦俳諧連歌の上よりすはれも
連歌まゝこれ俗情の風流をわハ一連歌を所せん
かとの句あるを全俳諧の功なりすやゝのあり
連歌の句いせん時連歌のありそハ連歌なりといふん
らんさ乃口惜くも後あゝらもあゝ一和歌ハ誦諧
躰あはを連歌も詠造すいせんらんや連歌師の
詠造めく句いせん時は方よりもそハ俳諧めくといふん

老かうううううう

は二評いつれうさもとまつた

一と一の雨降るくすさのまき家 作者不詳

けか句ハちうけけ自主の門人の他せしなまりとあるに
門人の句意を言ふかく日毎くは雨降るうを言ふハ
雨のたのしみも盡さるんと思ふ俗情なりといひ一とより
師ハこれを風情よすなきれ新日毎く降るちまき
まらふ雨秋の八月のむしあるまきつれいらんやま
けしをまき降つて一見すまことま一と一の雨の景お
とと深くおもひ深く安なりとれを降る牙子の句は
棄て己うてうとせり源俊頼朝臣の風おちうお

例もゆれて大切の秀吟ささうり不堪の人の口も墮し
ともおせしあんにと西ふま祝切最さううらなうら
學者皆時も忘ちさふはなり

雲・秀も月みから降るまき家

忘れてき旅寐を客のきぬが

おるい角とあーおれお系うか

おてふ掃ふ砌乃 押うれ

折々の連歌のか句いりえりもゆるがる句俳諧より
といてうんそハ連歌俳の口實まありと答んや

名月や月の中なる雪のうし

けうらう月この中なるなとておはハ連歌のうと

りよつまゝ俳諧とらふつまゝ西土人の如哥も花の上とく
俳士のつりつら月とらんも以越の松なと曲節を
つくされり山家集或本と中よはさのふくもく
も好いも有りもあはる萬葉の中よは好あり

おのち句雲霧を月とハかきせそを月あかきも書務
とて秋の月お清光をわらせし後之句も又曲節
乃巧あるをんよ連歌ともかき俳意ハ有ものぞ
のあつといひやすうといひたうと自然の句を云
やうもゆらんやすうにもやすうあり有はあつあり
のあつあつむさしをなぞうめ十哲なるといふ人この句に
ふ湯を飲こくの徒句ハ一句くにも又えんよく思ひ

うらうらうてまひーをりの論と熟讀すー

俳言とのよとらん有ー支考々私著せる二十五條
乃後端よ玄俳諧ハ何のよめよするものも俗談平話と
さんくめなりは正すといふも俳言といふもの大論に
して一節一夕の説盡つを辨別あつて萬葉の和歌
多くハ俗談平話也俗中の俗談とらありそは俳言
とすも忌癒なりよく正して用捨さへむー

あつていひ血あつたりと云ふなり

とりよ續句も宗因俳言なりーと俳言せしれーよー
俳力俳情詞のそいふん公の統諧と中事作り
安藤冠里君の清館よて其角を判者として三十六番の

話

話

鶏合乃句合真一なるも中よ

陸奥方極の禿々ころんていさる合 冠里

け清句か来一み沾州ハも此きこえ一者なれある自
出籠へらあられ出句の評なとまをせりけに州日あつれ
乃出他意なうく陸奥よとこそ遊されへくやとちよける
君位けるハ州ハけ道程疎とま一う俳志み疎くをわれ
そ方なとを日來むつ縁といつて句あ向てハ居るも何とも
せよ自分なるとハたぐ陸奥よとつてむつ縁とを俳誌
なれと笑ひせ給ふれハつあつて汗して詞なり一
とそ俳言といつてまよハるもよりのまよなきにハもあらん
暮の伊せめて非示堂をもむるのうらかり

あまみさ一あ一曳の山終り 貞澄

あまみさ一あまみさゆんくもあまみさく一の山終り
さ一異一言の俳諧秀他とらん一
けうなと連歌師のまゝ人連歌めくといんや詞もといん
ころも俳諧なるを忘れ

直鳥よ子鳥よせくも終りこの山

せくものといふ句意あても味一
あま月や月よ花身ゆくの月後の月といふも俳言とハ
いふもあま一く一の月後の月といふハ句よさうらけ
有つてものう中秋高夜を待宵といふこハ庭の詞なること
あまりてをまきせんといふも不葉の人き小豆月といふ

何と證とするやいさや事らむる月の動とよめ歌と十五夜
とあやまりとるやかほも連歌者流のお笑なるも俳諧乃
眾も落す一うら連歌の帳展風の類も紅梅とくらぬあ
梅ともいそれぬ石竹をい一のうけ八連歌よりも俳諧乃
方り自在あらん

又いさよあ月とをいふ一いさよひの月とをいふといふ

ま朝歌の秋風もたなひく雲とあやして峯もやまらふいさよひの月

いさよひや海老煮やとの正月の園

侍音や登るも二身へ及考いさよ 晋子

海老煮のいさよあもかまひよせしれり晋う句化り柿とえ
ゆらとんありてせしあらん

いつれの年の中秋も嵐雪氷壺の輩くらつとひて翁のこ井まの
門たうとや々々の月とせしれり湖水眺望もなつうらうの
山も登つて月のおしあとのそむも嵐雪志きりも夢あけは
人こえて二ハ何事よりといへて寝なく門さす時なりと嘆
ける嵐いよくはなるとさハ泣ふうとさ一えこれらなりすす
あつとつと笑ひを催しとるをうき遊ひなり
うの並居てがらふらむとら嵐も向て問題もくこくあれる
といふをいふにんぬつとやと嵐戯ふううよきたとへのゆ
菅相承の浄霊横川尊意僧正の浄館みて樓戸を焚
けり果柘榴なれそなり柿もても抽もても火焰似合
うら二れもて知しと詰けるとそ真ある話なれいさよに

かゝぬ始る句も題のうらくせらるるといふ論を不埒の人のよき人
傍題落題の病ハ俳諧漢句もろくは無き也

ある人麦林舎へ来りて由り俳諧學いんことをのぞむあり主
いふおもひらんけのハ業ハいつれやと云米穀を瀦南なりと答
主傍の小童を招て押後やの抱み米粒を入れて容の前あり
これハ何處の産なるやと同一客志ありしち又て何處の産なり
よき米よと云主曰俳諧とて別はあつた風流を四喜乃
造化相と散なりまのなまつものハ体を探麦前ハ升を抱く
蝶ハ菜島のくふ屋をわてまなく蟬ハ辛勞して衣を脱
しそめて樹上よ遊吟す題とするに草き山路もやさしく
龍膽ハ世末よあふるい海草も相く歌とそあけは牡丹も

芳菜も花の逆迷ありも菖蒲も尾花も趣向の足入ありて句の
姿情ときなれるなりけのいふハ業の米とて人足けの眼
なると風志たもいもよるうらなとてまはれよと客ハ歸
されしとてや伊勢の人乃話とておけりされとて浮草の
あちこちとてちよふまてわらわー達人もてハ在ー

其角う徒三四草らそりて雨のつれくをなくさめけるまよ
嵐雪来て曰ふハ杜鰭の句ありかとうふんくー利休のねと
ー穴くして二粒の三字をさるるりく助言ー終りねと云
晋子完ふと雪曰ふものけり也かつた又あらんそるに
け三字考始ハとておけり終りて晋曰雪り句を成就せー
句もて我くと試なりいさけ三字紙も去韻塞のそくー三人

話

あつりうちあひよりとくく人んそてかたふはのめやれん
おそふかりてなるとおもふもあつりて晋子のついでとて
ふせむるあつり雪を待雪待ちり歌はせとて人るに晋の
おせり雪う茶も遠はるりたれを雪うあつひ笑つこととそ
あつり

いへやの祠の風像を初一け吟と主とて佐屋小水鶏
塚造立の時加賀小松梅林院主能俊聖王廟守護の
登とていふとあつりあつりといはれ人のく俳諧り抑の人と
ろろへま向の句をいれそろろや有るむ

あひなつりくともひり人乃水鶏塚
とくくあつりよ一と一は院を訊ひけあつりあつり

時何れとなく話の序みせしれり嬌子ハ由順とてあつり
の人なり祖父能舜世あつり一時え禄二と一蕉翁
奥羽り御の乃乃次能舜雙小對話ありに翁主に
對し此かとの忠誠をさつりやあつりそとあつり

秋風を芒くちうはゆあつり能舜
ときろえけるれ翁あつり歎羨あつりうぱとにのてあつり
乃さうひ風待者一事とも由順ぬ一かたりきうあつり
又の日は父子あつりあつりて世後う哉函の事なつり
傍り干隣なるもあつりあつりて予も好色無飽之謂流とあつり
とあつりあつりてか句のそむ予あつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつり

註

と好ま地ておしぬある一の隻大も不真一いを物、於て
さうらの族法外の哉苗を来きこゆいらに於て新梅の
小とよりいするまやおもわらるゝの類ハ自のちりそ
こつうの嘆息あしはとさうしれ物一そき帝牡丹花
肖柏のち句なりとて

山陰ハいしぬる月乃又えぬ

とりの句ニハ是連歌漢句の中もいり一より二句と
なま句までいしぬると不のぬをたき又又えぬると
とむる志りも嘆息嘆息の落意の哉なるよ一
一句ハ自化のまきいしぬる

りもぬきお松灯そ鳴り 性 羊素

何人乃度寸塵既そさよ一しれ 他もさるん
はあ句よくおもひわくし一又おもひをう嘆息乃
句ありきよは意を借くしけそ哉とまりも横埒あり

けころもにっみてぬく一鴨の足
くしひすやねもいんあまふまのさき 祇徳
はたらひいうさうりも有一十八十九てあまうり
りりて考一

雑話終

古

湖南の許六雅兄予其角に贈る文を讀て疑難を
書し一日予と與へらぬ信は夙驕の人也其書源
して其論高し予う不才當へらぬ然る微意を
述て是を辨す是亦のこもきハ阿兄正し給へ
來書曰千歳不易一時流行の二つを以其角は本性
論せしむる兼る其角は器をくわく知終るる故に
生得相も苦めは志なく人の辱しめを志しぬゆゑに
返答の詞となく却辭をいふより若葉集の序とす
是らつゝめを志しぬゆゑ也
と來曰は雅阿兄の言をうり予亦おのづかや有て是を

阿答

三

五

贈る是を弁して佛道に益あり一智筆をさし一筆然と
來書曰然といへども予は神を怒て相撲と晋子の方
に
之す又諸門弟の句をあるは

去來曰阿兄の言信一予是も同く文中過分を
も然衆一終し事なく終

來書曰慥に紙を破てえらに近年諸集のくち
目立句あはれき大方晋子なり

去來曰阿兄の言感信をいづれの書より角々佳句の
多とすや予近年佛書よりとりたあく見る所此
書角々句十ありて貴す一也一二笑す相一二を
俗も世も平くの句之浪化集ありを山にも角々撰集

去來曰是れを中阿兄の句のゆひより角々句乃
とられを能きといふはをえん

來書曰かれは乃門弟もみえぬ

去來曰是れをくハ阿兄の過論をん角々才
の大なるをい備せハ我かれと頭よいづるも角々
句乃ひまをい論せハかうはを脚下をんむいそんや
後哲の人をや予尤て是をいあす同門の句をけ
る恐へる者又六筆あり阿兄も一人也

來書曰をんそや七師の句を對一等一くんと
論せしゆハ却る高牙乃誤といふ

去來曰阿兄のけ論精密をん予々其角々短文に

同答

亦る師の吟跡を齋しうすたとせり阿兄跡の字に
力を加給へたと一日二十里を東にす者あり
又十里を東行する者あり共跡を齋す角を
そのものする者あり昔日を某日いふより
名人多しといふはゆめに従語の跡に入ると人
はふ弱之角をれをきて曰吾子言志なり初は儼語を
神に入ると人ハ我翁也と某是を聞て吾子言志
亦一理ありと二言意味稍異といふも共先師を
以古人のまゝにすす人をも角師といふと
さ致とくまへんや
本書曰予不審の字師遷化の後諸門弟の句に

秀逸のおさぶさいうせ
と某曰論強う工夫を流すべし師教月と遠
く我意日に生れ秀逸のおさぶさなるは
その血脈を失ふ者ありむひよりけむのこま限るは
又と秀逸の事ハ先師在世の事といふも稀なるむ
又遷化の後もなるといひふかす世終とも今の世も南
ても秀逸を言つた人難そやむく先師凡兆
告て曰一世の内秀逸の句と五ありむ人ハ從者なり
十句も及ぶむ人も名人又先師人の句の奥意
み叶ものごと集て集を撰むとく終は是を笈の小文と
辨すとほく人より故有て予々名月の句を入集す

問答

三

と語終く至り日字句撰に入るる句いづく有や
先師曰汝る分の事といへば我が人の集り入む
句五ツ持し孰者ハ誰レ歟人是をんねりて更に
秀逸と云ふ世に稀なる一凡先師の門人の句を
賞し終ふや相商の称羨有過分の称羨あり門人
乞ふねりてまゝいとより自尤て終り己の位を志す
さへ人も多し又半途より自顧し悔しむ人も
これあり予う不敏といへども或ハ秀逸名句或ハ句
おもかあといへば或ハ我風騷汝達一あ士と云ふれり
賞刻感文すくちとせしむれども退てけし師の句に
正寸時を雲泥の遠ありけと同門の句に合する時を

群と云ふはたれも賞の才を盡せし事と云れり
又秀逸の稀なる事と云れり

來書曰近年湖南京師の門才不易流行の二つあるは
志をりまひまゝゆきて真の俳諧を失りといへん
去來曰け語阿兄の奥旨なきありと云ふはたれは是を辨
來書曰予たましく同門は對して句を論するに詞乃續
まひを付しんてと云ふは一句れも志をりまゝゆきて
若く句とせし是を刻琴柱に膠するたひをんり
去來曰け論阿兄のこゝむを其對し終り人三編也
凡志をりまひの風雅の大切にして忘へる者然も随分
の化者句こそまひ志をりたれりといへば先師のこ

られあり今日ふ等の他者ふんをさひしり乃
なま句をいひすらんや是をたふ祿うやいらんを
む及なり又有ハ其にましりといらんがし是を
厭持人ハさるるもあしむかのごとく論世ハあはた
口をたぐまんもさるる又壯年の人の句ハさし志を
ふえさるるも却ら又ずしといらん又初人の句ハ志ハ
さし志なるるを容易ましくしり亦ら其吟口困る
新味さるるは先師の教也

又云志をりさひハ趣向言葉善乃困寂なるをいふに
あしりさしと寂しき句ハた月ハ初きして外あり趣
もの言諾管吹といつらかしくし強てこれといふ

さしハ句の趣あり志をりハ句乃余情も有志ハ趣向
も詞器も又撰らんハ有しハ詞器よりしりも趣向
掛しハ毎塩ハ面ハ西施ハ鼻を流しハさるるも趣向
ゆしりしりも詞器よりしりハ又梅花の上ハ異哉
冷しハ句ハ同一がむ豈是をさるるがはしといらん
人信せんや

来書子曰一句ハ趣向なりと見ゆれども志ハ趣向
自体りてあしりなる句もあしむ

去来日雅兄の言たるハ凡ハ志をゆけりなる句もい
るハ趣向ハ句ハ志をいしり師の句を伺ふハ厳なる
もたありやさし物ハ賢なるものハ実神なるもたあり

你遠をゆも好あり平易な所あり健な所ありあま
なるもの有り好はうな所もの有りなるべし支那の衆
雅千姿万種ありといへどもさし志をりあまはる句を
あしなり阿兄よく先師の句をいかに人々を語れば趣向
詞詔のさしと構よよとを證也

来書曰又平年漸四十二血氣いさなをうへを句の
あまをちやくにえけん

去来曰阿兄の言をすべし然とも阿兄漸光の名を語
つるま句にさし志をりあまはる人愈せすといふべし
雅兄の他こは蕉門の秀なり句をいさし志をりあまを
み人るべしとせし

来書曰然とも光の来るんをいさし志をりあまを
つるまをいさし志をりあまをいさし志をりあまを

去来曰阿兄の言を法すべし然とも求すべし至る者を
生得の人なり阿兄の心口風騷ありて志をもるをいさし
事切なり好はるも年あまはるもいさし志をりあまを
手次ハ思へともいさし志をりあまをいさし志をりあまを
時ハ先師はこえはるもの多しいさし志をりあまをいさし
一人をまうすおほくハ是ねもいさし志をりあまをいさし
生得の人是を願ひ好名人ハ至る聖ハ願ひ天に
至るといふ古人の確言ありすや
来書曰詞をいさし志をりあまをいさし志をりあまを
いさし志をりあまをいさし志をりあまをいさし志をりあまを

去来曰阿兄の言的中せり 詞をかきりて 是を以て
誰う是をかきとせし 強る詞を以てさき 踏通
か句のそとく 歌ん 詞をかきり 他を以て 用ひ 歌
亦同日の論ありん

去来曰只一句の姿は 俳諧ありん 捨るもの ありん
去来曰け論阿兄にも 是の甚之 宗濂貞徳より 此
の教人の名客甚風 いつれ 俳諧の姿ありん せしん
然とも 宗周用られて 貞徳すこり 先師の次韵 起つ
信徳々七百韻 哀し 先師の 変風は けけるも ありん 栗
生し 次韵かき ぬるの日も ありん 栗原の 日ハ 猿蓑
みね 猿蓑 猿蓑も 炭俵は 破ら けり 用捨時 あり

かきりて 歌ありん 千歳 不易の 號を 起せり 去来曰
ともいふ ぬるの けり ぬる ぬる 是を 捨る 人あり
とせし

去来曰 不易 流行の 二つありん 去来曰 ありん 去来曰
て 趣向も ありん 去来曰 ありん 去来曰 ありん 去来曰
とせし 流行の 句を せしん といふ 他者 湖南の 沙汰也
去来曰 去来曰 去来曰 湖南の 人 故ありん 去来曰 ありん
今 愚をかき 去来曰 是を ありん 去来曰 ありん 去来曰
ハ 平生の ありん 趣向 句化と 前後を 論ありん 去来曰 ありん
に至りて 感偶する も ありん 趣向 ありん ありん 苦業する
も ありん 去来曰 趣向 ありん 去来曰 ありん 去来曰 ありん

句おんとする時或は新言の風あるその言風たるも
いづくたのも拂ひ捨てたる新風よ叶ふも守新風術
いづりて句さるも執志うは流りをあふ事、趣向
の後句乃新といふ人々も平生の業一途なり又
不易ハ一たの心も流れて変するもなり故に幸切
まかりの切も捨す平生も離るるもの之流りの句は
業する中或は不易の次ぐかひ来まハ別取て以是
と句と寸是を旧流の風のとくを矯む抱まわらぬ
平生の句業ハ只旧流と新風と秀句おん事、或
おの不易と流りを捨すはよと流りて又不易
流りを分て業する事、故ありていふなるべし

いづも或ハ奉納賀追悼賢人義士の類の賛のこ
とまハ必不易といふ句業するを要す又著題風吟
あるハ代門の人と對して尚流を介めり或も
新風をいづるといふ人といふことまハ皆流りの句を
以專に業す志うれども湖南の正秀ハ先師遷化の日
予に語て曰くしより後流りたるものさしり業を
不易の句をたのしむ人といふは皆故ありそ
いふ又新流りたるものも皆まハ二つを分て業するす
もわらん又吟友の會遊興も乘りて流りの句を志
て見せん不易の句をいへて聞せんといふあり是を
たす時は取ての放言く句の秀拙と成不成を賢愚

と時日ありるといふもはをわづらふといふんを
都る誤ある人々退くわづらふ阿兄の儼々遊び
る久し必旧深あつむ句葉はいつりてその様或
いて年々人を是を拂ひしを除く新風をわづら
ひしといふも有へくあふと思ふ口にはわづら
阿兄これと思ふといふも阿兄をわづらひて旧深
人々有といふも一度様々再々けつれの事々
人々かくの事々わづら人も又わづらとせしわづらも是
を賢者一人の上より衆人と一口にわづら

贈其角先生書

故翁奥羽の掃ゆり都へ載え流ひるる高門の沈潜
己に二変寸ふ事々為幻住菴を荷ひ棒と落柿舎に
くけて略すわづらひし様義是くも後
又一川の新風を起すれ安儀後儀義也去暮
向て日昨の風雅えなすも次韻をわづらひし
粟よりつらつらわづらひし志はくも変へて門人
を流ひり浴きん事を思ひわづらひしをさるる白に
千葉不易わづらひしわづらひし一時流ひりの姿あり是故
わづらひし教わづらひしも其わづらひし也一をさるるも

風雅の誠と云れぬ也不易誠と云れぬ不意と云
流りの句或學ひと云え風あつたを以て能不易と
志取人を往と云わくはすとの事なり
と云く一時流りの秀と云ふものをたのう口實
乃時を意のこほく代日流り乃場に至りて一歩も
あゆむとあつたと退てねもふ其角子力お
流りにあつたと云ふも其角子力九一即ち筆のこ
くく已う管見に息つきて道をなかり所と推さる
たつひおあつたみつと云ふ也うと云ふ事ハ書に
等一四西いつと然とも其詠草をかたりみまハ不易の

句はたつてハ頗る奇ぬを振へて流りの句に至りてを
と云ふそのかあしきを文へて流り角子の世との意通蕉門
乃高角く郊ら吟跡の師といふと云ふこと法蓮の
迷ひ同門のこみかうの流乃日汝う言去り流とも
凡天下の流と云ふも其先已う被位を定られたる人趣
みまふは是角く旧姿とわくもあつたなりて予う
流りも流りも云ふはくも光吟ももあつた人くも
雲煙の風も変するうとく朝暮もかゝらわつたれ
此も跡もく人事をたのめる狂客と云ふに風雅の
意と云ふと云ひく流りおたつと云ふも又お励

むね便ふゆ——去来う日昨の言かつす無きうは志うれ
とも部々風を詠まわらる本哥といつと代この集能
移向——以況や飢饉を新——を以て新と守を敢
代も何と憂す無きうは去来年をまつて易あつて
冰雪乃清きもろゆりて動さねて必は縁と生せり
う日 諸まのめ古格を改すとのやとも移水く此う
あつた角を以て紐乃菜刀なりと世人翁曰汝
言慎——角や今我う今日の時りおれしとも
りまらこころは風流を吐きしまらむも志る——は
来日さうさあり是を侍り年月わらむこと成歎のま

つみやき退ぬ義なうなり流ひてむり——はとせは
去秋を法あり今先生と我東西雲霧の恨といひ
うりといつとも移松柏嘉後乃齡をこころり幸に
言を書き——葉下におく故先生是といふ人——
流ひや

丁丑のこゝろ壬二月

落柿舎嵯峨去来評

全表 不記

あまのまゝあつて言ふ念八貴人妃

私去予の正坊の草稿に八貴妃とあり略通るは字はまじき妃と消して人と傍にあり

記念より流るるも 意をいひ哀傷とす綿帳の夜の
志しき事のよきは 誓巻のなを成ぬひまはるし 姉
と川のほとりさくらのもち世に流るる川にまじりての肌をうく
そふほひとさあゝ母をさや 恋は一物とせし人
むなむらさししりてやけ紙の念をき 意をもあゝん
そ常もあゝん梅木の宮屋乃 雲霞いとひ驛は
こもぬ乃のいせまをさしひて お母の園をさしとらふ
そよそあゝ人のほろりぬさせとらふも 北海は

浦く山館中亭の枕のよま八月をやとらぬまは
乃安藤乃下はきりくす紙まきくそ首まきく
そまきみてら百余里の嶮難終ふ首まきく
して羨濃玉大垣乃庄まいり紙なかそら紙
鏡を流しそ貧者の情を流す事ふうねを
ワレと志すも紙れしとくれぬ とうせ紙

たせ紙師翁回國はくもぶくお郷大垣まきく
とりて杭漉の水をくみて草鞋をくかき
ある紙漉草乃ゆより紙の念をとりいさく
系門人井戸といふものには紙まきく
沙のまきく是を禪定の念とせん勇まき
これを紙衣まきくか一人敵汝まきく
かうまきくを流すもまきく電く棺の中
まきくまきく

如行洋

まきくまきく

きり姫さま人う後を流流とあつたきつりて
話となりぬ越人くおそく来たてら屋
う人越人と越人う云

越人

くおーんかや井くまらぬいゝ念

たてこつて怪ねられて来たて念の記を讀て
やますこのやまのまらるゝあまみらぬより
あつた乃此の濱をまらるゝあままた海
りら終くすあまらるゝあままた海
さむいすや子あまらるゝあままた海
んて棄らんすあまらるゝあままた海
たのあつた念のまらるゝあままた海
よの厚ま事紙

あま良

たつたはあまらるゝあままた海

元禄二年己巳九月

五

古今志をうら後序

籟毛の調々むのつゝも管子あま
色を「息のうちにありくさるゝの長短ハ
意平ありてよく和すもこれハ八風律に
志ふふとつゝい万他諸より此へていふ寂
際まゝ志也句を自然にあり句平色
あゝとささむしくさるゝに強弱ありハ禁也
よくとこのふとまゝを甘き玲瓏とて

四表とて、ゆるゆる世人寂禁と聞くと唯も
響乾子とて、もともとの心くハ非
ち、ゆるゆるの多、ゆるゆる此とて是、
准、此寂禁のさひ志をり、ゆるゆると
道の榮、ゆるゆる、ゆるゆる

安永丙申春二月 暮雨巷



安永五 申年正月

戸

須原屋市兵衛

書肆

錢屋七郎兵衛

梅村宗五郎

播屋治兵衛

井筒屋庄兵衛 板

